慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦後の経済的革新（一）
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.1 (1916. 1) ,p.27- 42
JaLC DOI	10.14991/001.19160101-0027
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19160101-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ず。豐年更に一年繼續することありとせば其資金は一億七八千萬に達す可く、加ふるに資金融通の爲に一時的賣却を試るものありとせば其金額は更に多きに上らざるを得ず。單に米價調節の爲に斯る巨額の國資を投じ一國財政の基礎を攪亂するの果して有利なるや否や既に頗る疑問なるが上に此財政攪亂に伴へる經濟上の變動は更に其弊害を大ならしむるものある可し。少なくとも我國現今の如き財政經濟の事情の下に於ては實行し得可き所に非ざるなり　（未完）

戰後の經濟的革新（一）

阿部秀助

一

戰雲茫漠、今日を以て翌日を知ること難し、況んや遠き將來をや、只だ一事の茲に明言し得可きものあり、曰く、戰後に於ける獨逸の經濟生活が遂に戰役前の狀態を繰り返すこと能はざることなりとす、何故に舊時の狀態を復活すること能はざるか、若、復活すること能はずとせば、何れの方面に其活路を求む可きか、論者は是等の問題を以下の兩方面即ち對內的原因殊に非經濟的動機より促さるゝ經濟政策の變更と對外的原因殊に販路の變遷に伴ふ經濟政策の變更とに就きて、聊か解決を試みんと欲す。

二

過去一年有半の戰時的生活は獨逸國民をして幾多の苦き經驗を嘗めしめたり、而して是等の經驗中、殊に大なる不安と著しき動搖とを同國の民心に與へたるものは、云ふ迄もなく、獨逸其者が中間地位（Mittelstage）として有する危險性と、戰時に於て同國の農業が一般食料品を給付する能力に於て薄弱なりしことなりとす、今、前者に就きては暫らく論ぜずとするも、後者に就きて之れを見る時は、千九百十四年八月四日を以て公布せられし最高價格に關する法令の如き、或は同年同月同日を以て實施せられし食料品に關する輸入制限撤廢令の如き、明かに以上の弱點を曝露せるものなりとす。（註）

註　Sintenis, Finanz und wirtschaftspolitische Kriegsgesetze, 1914, S. 136-148.

而して此弱點は單に法令上に於て證明せらるゝのみにあらずして、實際上の狀態に於ても、同國が戰役前、自國民の營養を保持する爲め外國方面より輸入せし食料品の量は先づ穀物『裸麥、同麥粉、小麥、同麥粉、スペルツ、大麥（「グラウペン」及「グリェス」を含む）燕麥等』豆類、及馬鈴薯にありては全消費高の一七「パーセント」一四、野菜類は四「パーセント」三三、果物類（乾果を加ふ）は二四「パーセント」五五等にして、之れを生理學的に考察する時は獨逸全國にて消費せらるゝ「カロリ」總量の一九「パーセント」六四即ち蛋白質にありては需要額の二七「パーセント」五、脂肪にありては四二「パーセント」五、含水炭素にありては八「パーセント」二五に達せり、之れを要するに戰役前に於ける獨逸農業の給付能力は同國々民需要額の五分ノ四を出でざりしものにして、尙ほ其以外に家畜の飼料として輸入せられしもの少からず、以て同國の農業が一朝有事の場合に際して、國家の獨立的地位を確保するに充分ならざることを知るに足る可し、想ふに戰役前に於ける獨逸の經濟生活は二個の方面に於て外國に對し隷屬的地位にありしものにして、即ち其第一は資本的方面にして、只だ此點は麻洛哥問題當時の失敗に鑑みて即時、返濟せし結果、何等累を今回の戰役に及ぼさゞりしと雖、然かも食料品問題に至りては依然として獨逸其者にとりて、不安の要素たるを以て、戰後の獨逸が第一に解決せんとする點は、恐らく此問題にして即ち如何にせば戰後の獨逸は自國民の食料品に對する自給力を發達せしめ得べきか、如何にせば一朝有事の際に於て安全に自己の食料品を求め得可きかの點にありと信ず、而して之れが解決策として識者の論ぜるものには、自から消極的、積極的兩方

面あり、即ち消極的方面の主なる方法は食料品政策の合理化にあり、今「エルッバッヘル」氏の最近に於ける調査を見るに、獨逸全國民の一年間に於ける之れが需要額は充分に見つもりたる場合に蛋白質にありては、百六十萬五千噸（一噸は千「キログラム」）熱量としては五十六萬七千五百億「カロリ」なるに、從來、實際的に消費せられし量は蛋白質にありては二百三十萬七千噸、熱量に於ては九十萬四千二百億「カロリ」たりしを以て、差引、蛋白質に於て七十萬二千噸、熱量に於て三十三萬六千七百億「カロリ」は同國々民が彼等の生活を保持する上に於て必ずしも必要とせざるものなりとす、換言すれば蛋白質に於て必須的需要額の四六「パーセント」、同じく熱量に於て五七「パーセント」を低減し得るものなりと云ふにあり、然かも吾人の趣味性が時として學理を超越することは、獨逸に於て裸麥より營養價値少き小麥の需要額が年々增加するに至りしを以ても知るを得可し、故に學理一式の食料品政策は實驗室以外に於ては比較的其實行困難なる可しと信ず。（註）

註　Prof. C. von Noorden, Hygienische Betrachtungen über Volksernährung im Krieg, S. 13. u. P. Eltzbacher, Die deutsche Volksernährung und der englische Aushungerungsplan.

第二、積極的方面に就きては、自から對內的政策と對外的政策とに分たる、先づ對內的政策としては、第一に國內に於ける穀物栽培面積を出來る丈け增加せしむるにあり、而して荒蕪地及沼地の開拓は既に戰役前、各聯邦殊に普魯西「メクレンブルグ」「オルデンブルグ」等に於て國庫補助の下に實行せられし結果、獨逸全國を通じて、之れが面積の增加は千八百八十五年より千九百十三年の間に於て約七十萬「ヘクター」即ち年々約八百萬噸の增收獲を得るに至れり。（註）

註　Dr. O. Sarason, Das Jahr 1913, S. 230. u. Prof. K. von Rümker, Mit Schwert und Pflug! S. 18.

更に、今回の戰役は恰も奈翁戰爭時代に於ける英國の如く一は國內に於ける穀物價格の騰貴と他は國家其者の奬勵の爲め（現に「ザクセン」の如きは極めて低廉なる地代を以て國有地開拓を企てしめたり）其面積たる增加するに至りしや明かなり、但、是等の努力によりて同國に於ける穀物の收穫高が二倍するに至る可しとは吾人の信ずること能はざる處なり、況んや同國の地味は將來の獨逸にとりて歡迎せらるゝ小麥の栽培に不適當なると共に、其地代は自餘の穀物產地に比して著しく高價なるに於てをや、次ぎに對內政策の第二は工業に於けるが如く、機械力を農

業上に利用して之れが生産額を増加せしめんとするにあり、而して機械殊に動力的機械の利用は既に戰役前吾人が同國の農業上に於て見し處にして、例者「マンハイム」の「ラレッ」商會製造の「ケスチェギ」式農具の如き或は之れに類似したる「フォン、マイエンブルグ」式農具、或は「シーメンス・シュッケルト」式の如き、其主なるものとす、蓋、戰役前、同國の農業に從事せし勞働者は工業上の勞働者の數千八百六十七萬五千百四十一人に對して九百六十三萬七千九百二十九人なりしが（千九百七年調査）今回の戰役は自から是等の數を減せしむるに至り、斯くて勞働者階級の減少と戰後經營事業の過多とは自から同國をして勞力の拂底を感せしむるに至る可し、而して斯くの如き勞力の拂底が勞銀の増加を呼起す場合に於て（既に戰役前に組織せられ「獨逸地方勞働者組合」の如き千九百十二年には其會員一萬八千百五十七人となり、又「エッセン」を根據として「フランツ、ベーレンス」によりて指導せらるゝ獨逸の林業、農業、及葡萄栽培等に從事せる勞働者の中央組合の如き普ねく支部を各地に設け、以上、兩種の組合は共に勞銀の増加を以て主なる要求とせしものなりとす）地方に於ける農業經營者は此高價なる勞力の一部に代ゆるに機械力を以てせんとするものある可し、但、獨逸の農業上に於ける機械力の應用が米國の場合と同じき效果を奏す可きかは吾人の疑問とする處なり、何んとなれば、米國に於ける大農主義的發達と異なりて、獨逸にありては穀類馬鈴薯栽培面積の七四「パーセント」乃至七九「パーセント」が小農者の手中に存し、殊に蔬菜栽培の場合の如きは約八八「パーセント」に達せり、之れに加ふるに工業が自から集中的傾向を有して、機械利用の價値を大ならしむに對して、農業上の土地は各地に散在して、之れが利用を不可能ならしむると共に、農業にありては工業と異りて、機械利用の時期が或時期に定限せらるゝことは、之れによりて收益を求むる程度を減ぜしむるに至る可し、故に戰後に於ける獨逸の農業が機械の利用によりて其生産力を多く向上せしむることは吾人の信ずること能はざる處なり、次ぎに對内政策の第三法は、最近「リュムケル」教授の發表せる如く、所謂、遺傳の方則によりて出來丈け良種の小麥を造り、之れによりて其收穫を増加せしめんとするにあるも、之れ亦た今日にありては尚ほ實驗上の範圍に止まりて、未だ實行の緒に就かず、（註）

註　Prof. K. von Rümker, Mit Schwert und Pflug! S. 19.

之れを要するに、以上、吾人が列擧せし對內政策の三方法は、何れも戰後に於ける獨逸農業の自給能力を增加せしむる上に於て多少の效果ある可きも、未だ外國產を杜絕するに足るの良法とは信ぜられず、既に外國產を驅逐すること能はずとせば戰後の獨逸は果して何れの國に穀物の補給を求むべきかの問題を生ぜざるを得ず。

吾人は此問題を解決するに先ちて、茲に世界の各地に於ける穀物栽培面積と之れが收穫の狀態を擧げんと欲す。

穀物栽培面積表（但、千「ヘクター」單位）

國名	小麥及スペルツ	裸麥	大麥	燕麥	玉蜀黍	穀物栽培面積總計	馬鈴薯
歐洲方面	二三・三〇〇	二八・五〇〇	一〇・五〇〇	一七・〇〇〇	一・四〇〇	八〇・七〇〇	四・四〇〇
露西亞 亞細亞方面	五・〇〇〇	一・二〇〇	一・〇〇〇	二・〇〇〇	五五〇	九・七五〇	一五〇
北米合衆國	一九・〇〇〇	八五〇	三・〇〇〇	一三・五〇〇	四〇・五〇〇	七六・八五〇	一・四〇〇
印度	一〇・五〇〇	—	—	—	—	一〇・五〇〇	—
佛蘭西	六・五〇〇	一・二五〇	七二〇	三・九〇〇	五〇〇	一二・八七〇	一・六〇〇
アルゼンチン	六・〇〇〇	—	—	五〇〇	三・〇〇〇	九五・〇〇〇	五〇
伊太利	五・〇〇〇	—	二五〇	五〇〇	一・八〇〇	七・五五〇	二八〇
墺太利	四・九〇〇	三・二〇〇	二・三〇〇	三・〇〇〇	三・四〇〇	一六・八〇〇	二・〇〇〇
匈牙利	三・五〇〇	—	七〇〇	四・〇〇〇	一四〇	八・三四〇	二〇〇
加奈太	二・五〇〇	—	—	二七〇	一四〇	二・九一〇	五七
濠洲	二・二〇〇	六・二〇〇	一・六〇〇	四・三〇〇	—	一四・三〇〇	三・三〇〇
獨逸	一・八〇〇	一五〇	五五〇	四三〇	二・〇〇〇	四・九三〇	三二
ルーマニア	七〇〇	二六	七五〇	一・六八〇	—	二・一三〇	二三〇
英國	一〇〇・〇〇〇	四三・〇〇〇	二九・〇〇〇	五二・〇〇〇	五五・〇〇〇	二七九・〇〇〇	一四・〇〇〇
總計							

以上各地收獲表（一「ヘクター」收獲高は「ドッペルチエントネル」單位）

國別	小麥	裸麥	大麥	燕麥	玉蜀黍	以上穀物總收獲高	馬鈴薯
	收獲高 一「ヘクター」ノ收獲高	收獲高 一「ヘクター」ノ收獲高	收獲高 一「ヘクター」ノ收獲高	收獲高 一「ヘクター」ノ收獲高	收獲高 一「ヘクター」ノ收獲高	收獲高 一「ヘクター」ノ收獲高	收獲高 一「ヘクター」ノ收獲高
歐洲方面	一五〇〇〇 千噸 六、五	一〇〇〇〇 千噸 七、〇	八五〇〇 千噸 八、一	一二五〇〇 千噸 七、四	一五〇〇 千噸 一〇、七	五四五〇〇 千噸 七三	三〇〇〇〇 千噸 七、三
露西亞 亞細亞方面	一三五〇〇 七、〇	八〇〇 六、三	七〇〇 七、五	一五〇〇 七、七	一〇〇 一〇、〇	四〇〇〇 七五、〇	五六
北米合衆國	一八二〇〇 九、八	八〇〇 九、九	三六〇〇 一三、一	一三五〇〇 一〇、一	六九〇〇 一七、一	一〇五三〇〇 八八五〇	六五
印度	八一〇〇 七、六	—	—	—	—	八二〇〇	—
佛蘭西	九〇〇〇 一三、六	一三〇〇 一〇、六	九五〇〇	五〇〇〇 一二、六	六〇〇 一一、九	一六八五〇	一三五〇〇 八六

アルゼンチン	四三〇〇	七、二	—	五〇〇	一〇、〇	三八〇〇	一〇、二	八三〇	一〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—
伊太利	四七〇〇	九、三	一三〇〇	一〇、九	三三三	一四、一	九三三	一四〇〇	一三、三	一〇、三	二五〇〇	一三、七	一四〇〇	一三〇〇	一四、一	九三三	一四〇〇
匈牙利	六〇〇〇	一三、二	五五〇〇	二、八	三〇〇〇	一〇、五	五〇〇	一六、七	二三〇〇	一〇、五	五〇〇	一三、七	二四〇〇	一五〇〇	二、二	八、九	一五〇〇
加奈太	四〇〇〇	一二、五	—	四五〇〇	一二、一	五〇〇	—	一〇〇〇	一一、五	一〇〇〇	四五〇〇	一二、一	一〇〇〇	四三〇〇	一五、七	一〇、六	一九〇〇
濠洲	一〇〇〇	七、八	—	三〇〇	九、二	三〇〇	—	七、九	三〇〇	一八、三	三〇〇	七、九	三〇〇	四〇〇〇	七三	七三	一九〇
獨逸	四三〇〇	三〇、一	一〇〇〇〇	一九、七	—	—	—	一四、〇	三五〇〇	一九、七	八五〇〇	三五九〇〇	四五〇〇〇	一三〇	一三六	一九、六	一三六
ルーマニア	一〇〇〇	一、二	一四〇〇	八、三	三五〇〇	八、三	二四〇〇	二、八	九五〇〇	七、八	五〇〇	九五〇〇	一三〇	一三〇	一三八	九、三	一三八
英國	一五〇〇	三、二	—	三〇〇〇	一八、九	—	—	—	二〇〇〇	一八、三	一五〇〇	二〇〇〇	六五〇〇	一三〇	一三八	一九、六	一三八
總計	四〇〇〇〇	—	四〇〇〇〇	五五〇〇〇	—	八六〇〇〇	—	五〇〇〇〇	—	五〇〇〇〇	一五〇〇〇	五〇〇〇〇	一五〇〇〇	一五〇〇〇	一五〇〇〇	一五〇〇〇	一五〇〇〇

註 Prof. K. v. Rümker, Mit Schwert und Pflug, S. 26 u. 28.

而して獨逸の將來にとりて最も必要なる小麥に於て之れが世界的供給地として、以上の表中に現はれしものは露西亞、北米合衆國、「アルジェンチン」、加奈太、「ルーマニア」、濠洲、及印度にして、今、獨逸が一朝有事の際、是等の地方の何れを以て自國民の食料品に對する供給地たらしめ得可きかと云ふに、加奈太、濠洲、印度は英國の殖民地たる間は勿論是等の方面より輸入することは不可能にして、又「アルジェンチン」は英國海軍が强大なる限りは、之れ亦は其供給困難なる可く、北米合衆國に至りては最近、人口增加の結果之れが輸出能力は漸次減少の傾向を有するに至れり、次ぎに露國は戰役前にありては、獨逸に對し最も有力なる小麥の供給地にして、現に千九百十三年に於て露國が獨逸方面に輸出せし穀物の數量は約十六億「プート」（一「プート」は一六「キログラム」三八）に達せるも、然かも今回の戰役が明かに吾人に示す如く、一朝有事の際に於て敵國たり得る史的關係を有する露國が之れが輸出を禁止するに至る可きことは、明かに同國が獨逸其者にとりて理想的の穀物供給地たる資格を有せざるものなりとす、最後に「ルーマニア」は穀物供給上に於ては露國と競爭者の地位にあるも、然かも同國內に於ける佛國の勢力は牢として拔く可からざる限り之れ亦安全なる補給地と稱するを得ず、觀じ來れば、過去に於て世界的市場に小麥を供給せる以上の地方は、一も獨逸其者の戰時に於ける危險性を滿足に解決せしむるものにあらず、（註）余輩は此點に於て穀物供給地としての匈牙利其者の將來に對し之れが考察をなさんと欲するものなり。

註 Graf. v. Moltke, Noch ein Wort über Krieg und Volksernährung (Preussische Jahrbücher, B. 155, S. 477.) u. E. Daniels, England's wirtschftlishe Lage und sein Bruch mit der Türker-Rumänien. (Preussische Jahrbücher, B. 159, P. 179.)

吾人が匈牙利を以て將來獨逸にとりて最も有望なる穀物供給地となし、よりて以て露國に代ゆるを得可しとなす理由は一にして足らず、其第一は匈牙利產小麥の品質の極めて佳良なることなり、即ち獨逸產小麥に於ける「プロタイン」含有量が平均一二「パーセント」に達せざるに對して匈牙利產は如何なる劣種の物と雖、一二「パーセント」四分ノ三以上を有し、殊に同國に於ける「メツォエギエス」產は一六「パーセント」「タイス」流域地方の產は一七「パーセント」に達せり。次ぎに第二の理由とする處は、若、經營宜しきを得るに於ては增收の見込充分なることなりとす、即ち、現時匈牙利に於ける小麥の年產額は平均四千五百萬「メーターツェントネル」にして略ぼ獨逸の產額と相同じ、但、後者が集約的經營の結果として（一平方粁の栽培面積に英國は二百二「キログラム」の加里を消費し、佛國は八十「キログラム」北米合衆國は百四十一「キログラム」を消費せるに對して、獨逸は實に千二百四「キログラム」を消費せり）一「ヘクター」に十九「メーターツェントネル」半の收穫高を得るに對して前者は十二「メーターツェントネル」四分ノ一に過ぎず、然かも匈牙利其者の地味が尙ほ多くを生產し能ふことは、最近「メツォエギエス」に於ける模範經營事業が平均一「ヘクター」に就きて二十二「メーターツェントネル」の收穫を齎らせしを以て知るを得可し、故に其經營にして宜しきを得んか、從來の產額たる四千五百萬「メーターツェントネル」は九千萬「メーターツェントネル」即ち現時收穫の約二倍に增加するを得可し其結果、墺太利及匈牙利の需要額は勿論、優に獨逸の不足額をも補充するに足る可し、次ぎに第三の理由とする處は匈牙利が尙ほ一箇の農業國にして農產物によりて自活することなりとす、試みに同國に於ける工業發達の狀態を爾余の諸國と比較するに英國は百人に就きて工業に從事せるもの四五・八、獨逸は三七・五、佛國は三五・五、墺國は二三・三、匈牙利は一三・四「セルベア」は一二・四「ルーマニア」は一〇「ブルガリア」は七（註）なりとす、斯くの如く匈牙利が「バルカン」の小國と略ぼ伯仲の間にあることは、一面、獨逸の如き工業的發展をなすものとは彼等の取引上に於て經濟的調和を求むるに好都合なりとす、次ぎに第四の理由とする處は面積の大なる點なり、即ち獨逸の面積五十四萬平方粁に對して墺太利匈牙利は六十七萬六千平方粁に達し、之れを前者に比すれば約二五「パーセント」大なるものなりとす、次ぎに第五の理由としては墺匈兩國に於ける勞力の豐富なることなりとす、今、假りに千九百

七年調査の獨逸勞働者の數九百六十萬に對して千九百年の調査による墺太利匈牙利の農業勞働者の數は合して千四百三十萬(墺太利八百二十萬、匈牙利六百十萬)に達し獨逸より多きこと五〇「パーセント」以上なりとす、斯くの如く勞力に於て潤澤なりこしとは、過去の匈牙利をして出稼人を以て重要なる輸出物たらしむるに至れり、第六の理由としては匈牙利が全然獨逸民族に無關係の國にあらざることなりとす、即ち、現時匈牙利の人口は二千一百萬にして、其中千萬は匈牙利人にして二百萬は獨逸系統なりとす、斯くの如きは又た獨逸と匈牙利との調和をなさしむる上に於て之れが楔子の用をなすものなり」と信ず、以上述ぶるが如く匈牙利の將來は農業國として有望なるに不拘尙ほ今日に於て獨逸の如く集約的經營の緒に就く能はざる所以は、主として國內に於ける資金の缺乏にあり、試みに同國に於ける國債增加の狀態を見るに千八百六十七年より千九百十年の間に於て五十億「クローネ」、千九百十年より今回の大戰役開始迄二十億「クローネ」更に戰役の進行につれて以上の額は著しく增加するに至りしなる可し、既に戰役前匈牙利に於ける稅率は歐洲諸國中、殆んど他に類例を見ざる程、高率に失せしものにして、同國の首都「ブダペスト」の物價其他住宅料等が歐洲に於ける自余の大都會に比して著しく高きも、之れが一部の原因は實に同國が巨額の債務を有するの點にありとす、故に今日の匈牙利をして自繩自縛の地位より脫せしむる爲めには、出來得るたけ之れに資金の融通を與へざる可からず、而して之れによりて革新せらるべき方面凡そ三つあり、其第一は爲替相場の低落を防止すると共に、側ら「マルク」本位との連絡を保たしむること、第二は國內に於ける信用制度の基礎を鞏固ならしむることなりとす、蓋、匈牙利の經濟界を支配せる金融機關は只だ「ブダペスト」に於ける二個の銀行を除きて、他は多く外國殊に維也納を根據とするものにして、兩國其利害を異にする結果時に是等の銀行に於て其財囊を引きしむるや其影響は直ちに匈牙利の經濟界に及び乱調子の狀態に陷るに至りしこと一再ならず、第三は國內に於ける產業奬勵即ち(一)農業上に於ける生產額を增加せしむる設備、換言すれば集約的農業經營(二)農產物によつて求めらるゝ製造等即ち製粉業、酒精業、製糖業、麥酒釀造業等の奬勵(三)國內に於ける富源の開發例者千九百九年に突然爆發せし天然瓦斯の如きは之れが好適例にして、殊に「キス・ザルマス」の瓦斯泉は日に百七十萬立方「メートル」

に達し、假りに點火用として一年間に使用せらるゝ量を計算する時は當に二萬噸の石炭によりて生ずるものと其效力を同ふす、而して之れを首府「ブタペスト」に流入せしむる時は一立方「メートル」を二・四「ヘラー」にて點火用に供するを得可く、之れを從來の一立方「メートル」の價格七「ヘラー」に比すれば非常に低廉と云はざるを得ず、之れを要するに、獨逸にして匈牙利を以て自國の食料品に對する安全なる供給地たらしむる爲めには、一面、自國經濟的發達と衝突せざる範圍に於て、之れが經濟的膨脹を助長せざる可からず、之れを助長せしむる爲めには、約十億「クローネ」の資產を放下すること必要なりとす、獨逸果たして斯くの如き勇氣あるや否やは、自から戰後に於て決せらる可き問題なり（未完）

註　E. Pályi, Deutschland und Ungarn, S. 21.

貸借對照表に於ける資產評價の原則に就て

三邊金藏

一

貸借對照表に於ける資產評價の如何は該貸借對照表の價値の全體を定むるものにして、資產の評價其當を失せる貸借對照表の如きは殆んど一片の反古に等しと云ふも蓋し過言にあらず。然れば實際に貸借對照表作成の任に當る者は須らく思を此處に致して不當なる價額を計上するが如きは嚴に之を戒愼せざるべからざるなり。然かれども此際如何なる評價を以て不當なりとなし、如何なる評價を以て當を得たりとなすべきや、是を決定する標準若くは原則は、從來我邦一部の識者間に議論ありと雖も、未だ必しも歸一せざるが故に、事實に於ては未だ確定せざるものと言ふ可し。即ち實際に於ける資產評價が、時に一時の都合主義に流れて健實